

コース案内1日目

湖西連峰は浜名湖の西方に位置し、湖西市から三ヶ日町にかけて連なる山々の総称です。湖西市梅田を南端とし、**嵩山（すやま）**（170.4m）、**神石山（かみいしやま）**（325.0m）、**多米峠（ためとうげ）**（265m）、**本坂峠（ほんざかとうげ）**（320m）、**坊ヶ峰（ぼうがみね）**（446m）と比較的低い山々が連なり、その尾根は愛知県との県境になっています。また自然もよく残され、浜名湖県立自然公園の一部に指定されています。

尾根からは、浜名湖や、遠くに富士山や南アルプスも望まれ、西に三河平野や三河湾が見え、眺望が良いことから、昔からハイキングコースとして人気があります。また周辺には県指定の天然記念物トキワマンサク群生地、**摩利支天（まりしてん）**、**不動の滝（ふどうのたき）**、**大知波廃寺（おおちばはいじ）**など、見どころも多くあります。

湖西連峰は老年期の山地で、秩父古生層（ちちぶこせいそう）と呼ばれる地層から成っています。大知波などにはマンガン鉱が知られ、三ヶ日町の本坂峠付近やその北部には石灰岩が分布しています。気候も極めて温暖で、その特徴が、生えている植物にもあらわれています。

シイやカシ類を中心とした林や、ヤブツバキ林が発達し、その林下にはウラジロやコシダが茂り、山全体の植物群落としては、アカガシ・アラカシ・コナラ・ヤブツバキなどが高木層を、ヒサカキ・アオキ等が低木層を形成しています。

この付近で特筆すべきものに、トキワマンサクの自生があります。この植物は、湖西市のほか国内では三重県・熊本県にしか分布しない貴重な樹木で、4月下旬～5月上旬にかけてクリーム色の花を咲かせます。自生地は県天然記念物に指定されています。このほか、野鳥や昆虫も多く、自然観察の適地といえます。

さて、まずは**梅田公園前**を出発。ほどなく湖西工業用水道浄配水場を右手に、さらに新池を左手に見ながら「湖西連峰ハイキングコース登山口」という標識を鋭角状に右折します。登山口付近にはクロガネモチが見られます。コースは梅田峠に向かってやや広い道がなだらかに登っています。カギカズラや、コシダ、ウラジロといったシダ類や、シイ、ヒサカキ、コナラ、カクレミノ、リョウブ、ヤマザクラ、アラカシ、クスなどが点在する道をしばらく登った所が**梅田峠**で、嵩山展望台、さらには摩利支天へと続く分岐路になっています。右に曲がれば嵩山山頂へのルートになります。

さてコースは梅田峠を西に向かい、いよいよここからがシイやカシが優先する常緑広葉樹が続く稜線歩きとなります。なお、その登山道の両脇には地元の子供達が「ゴミ0（ゼロ）」を願って設置した羅漢像が立ち並んでおり、その様々な表情は道行く登山者の目を楽しませてくれるはずです。梅田峠からしばらくアップダウンを繰り返しながら、ヒサカキ、リョウブ、コナラ、シイ、ヤマモモ、サカキ、シロダモ、ミツバアケビなどを見て、楽しみながら高さを増していくと、もともとは石彫りの仏像があったと言われている**仏岩（ほとけいわ）**（214m）に出ます。仏岩付近は急な登りや下りで、頂上付近

やそれを過ぎたあたりでは岩が露出しているところがあるので、注意をして通過して下さい。仏岩直下には、仏岩バイパスと呼ばれる迂回ルートもあり、時間短縮にはなるが、そのルートを使用しないようにし、仏岩からの眺望を満喫しよう。この付近にはアセビ、モチツツジ、ヒトツバ等が見られます。仏岩を通過後、さらに進路を北北西に変えて送電線に沿った県境の道を進みますが、**ラクダ岩分岐**を越えると、神石山までは急な登りが続きます。何度かのアップダウンを繰り返して、最後の急登を登り、**普門寺(ふもんじ)**へと下る分岐を過ぎると、ほどなくして神石山山頂です。この神石山までの登山道には、アカガシやアラカシとシイが密生し、林の中は昼間でも薄暗く感じ、その他にも、ユズリハ、ヤブニツケイ、ヒサカキ、シロダモ、ヒトツバ、イヌマキ、サルトリイバラ、カクレミノ、ムベ、ヒイラギ・マメヅタ、ミヤマシキミ等が分布しています。この神石山から南西に尾根が、**船形山(ふながたやま)**(276m)、二川テレビ塔、豊川用水東部幹線水路を過ぎ、東海のプチ尾瀬と言われる**葦毛湿原(いもうしつげん)**まで伸びています。下見等で時間がある時には、葦毛湿原まで足を延ばして、湿原に咲く可憐な草花を楽しむのもいいでしょう。

神石山には標高325.0mの1等三角点があります。県境にも位置し、富士山、浜名湖や浜松市街地の象徴であるアクトタワーも拝むことが出来るので、可能であればここで一息入れたいところです。

さて、神石山からも北に尾根筋のコースが続きます。ところどころで、視界が開け、西には豊橋市街や、三河湾、東に浜名湖や富士山が望まれ、眺望を楽しむことができます。しばらくヒイラギ、ミツバツツジ、ヤブツバキ、リョウブ、シロダモ、イヌツゲ等の樹木が続くコースを進み、**太田峠跡**を経て、登りかけたところで大きな岩に遭遇しますが、そこは**雨やどり岩**といい、回り込んで岩の上に出ると、ヒトツバが群生しており、岩上に登ると見事な展望スポットとなっています。その後は**中尾根分岐**(351m)へと進みます。この中尾根分岐でコースは直進しますが、この分岐を東に進んで下って、道に迷わないようにして下さい。さらに以前と違ってこのあたりは伐採が進んでいて、展望こそ素晴らしいですが、その分、こまめな水分補給に心がけ、炎天下での熱中症にならないように気を付けて下さい。その中尾根分岐を過ぎ、しばらくすると**多米峠**に到着します。この多米峠までの登山道をはじめ、湖西連峰にはヤブツバキの群生地が点在していますが、この花が咲き終える春先の季節に、登山道がその赤い花で覆われてレッドカーペット状態になる様がまさに圧巻です。

さて、多米峠に到着すると、まず巨大なヤブツバキが目に入ってきます。峠周囲は巨木におおわれて展望はききませんが、その樹木や林の下ではフタリシズカ、シモバシラ、オカトラノオ、ノコンギク等の草花を楽しむことができます。また、ここは車道が近く、西に下れば県道豊橋-大知波線に至り、いざというときのエスケープ地点にもなっていることを付け加えておきます。

多米峠から**赤岩(あかいわ)分岐**まではしばしの登りが続きますが、特に標高400mの無名峰を巻く付近までは、疲れた身にはちょっとした正念場になるかも知れません。この無名峰を巻いた後、岩が露出し、急な下り等あるため、注意して通過して下さい。さらにコースは赤岩分岐から右へ折れて北北東

へ進みます。ここからは、アオキが群生してトンネルのようになった場所や、かつては600本あまりも自生していたというイヌツゲの群生林があり、実際イヌツゲの曲がった枝が織りなす自然の造形には目を見張らされます。そして、ミツバツツジ、モチツツジ、カラスザンショウ、タラノキ、アカメガシワ、クサイチゴ、マムシグサ等を横目に小ピークをいくつか越え、さらに**石巻（いしまき）分岐**も経て、やっと視界が開けたところが**大知波峠（おおちばとうげ）**です。この峠は静岡県側の湖西市知波田地区から愛知県豊川市の豊川稲荷に通じる山岳道「**豊川道（とよかわみち）**」の最高地点でもあります。またこの付近には**大知波廃寺跡**があり、峠の尾根筋から東側にやや下った広さ約3.7ヘクタールの緩やかな斜面に、平安時代中期に栄えた山寺の跡地が今なおひっそりと登山者を迎えてくれています。この大知波峠付近はワラビ、ゼンマイ、イタドリ、ウコギ、ノアザミ、オオバコ、スギナ、ヨモギ、ヤブニッケイ、シロダモ等が分布しているのに加え、何よりもここからの眺望は素晴らしく、湖西市や浜名湖、浜松市街など遠州一円を見渡すことができる、最高のロケーションとなっています。

さて下山路ですが、大展望に後ろ髪を引かれながらもまっすぐ下って行くと、そのままトンネル状の樹林帯へ入ります。ここからは東に向けてトラバースぎみのコースが続きますが、5分もしないうちに、向かって右側へと鋭角に下って降りて行く小道との分岐（「**鍋割（なべわり）の水分岐**」）があります。その名の通り5mほど登山道から下に下ると湧水があり、「この湧水を鍋にとれば、水の冷たさから鍋も割れてしまう」という言い伝えもあります。しかし、ここでは、その分岐を下に降りずにまっすぐ進み、そのおよそ200m先にある「**炭焼き窯跡**」を左手に見ながら歩を進めていくと、50mほどで「**（ヤブ）ツバキの群落**」地帯がコース沿いに現れます。ここを過ぎたら、ほどなくして富士見岩登り口へと続く林道と合流します。

なお林道はほんの数mだけで、すぐに登山道へと戻ることになりますが、そこをしばらくトラバース気味に進んで行くと、「豊川道」の道標があるところを大きく右方向へ転回し、下り始めることとなります。ただし、ここから東南東にまっすぐ下る下山路は終始薄暗く、途中粘土質の道や、苔むした石もあり、かなり滑りやすくなっているため、捻挫をしたり、スリップや転倒で怪我をしたりしないように十分気をつけて下ってください。

コースはやがて不動の滝南分岐に出ます。ここは**不動の滝（ふどうのたき）**から下りてくるルートとの合流地点です。この不動の滝に至る道沿いには当時の農民が隠し田として作っていた棚田の跡や、雨乞い神事の不動尊を祀る祠などを見ることができます。

最後に、その合流点を道標に従って右へ折れ、やはり足もとに注意しながら進むと、ゴールの**おちばの里**はもう目の前です。